

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

多文化相関構造研究

著者	度会 好一
ページ	1-4
発行年	2009-04-05
URL	http://hdl.handle.net/10114/3505

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 4 月 5 日現在

研究種目：萌芽研究
研究期間：2008
課題番号：20652023
研究課題名（和文）多文化相関構造研究

研究課題名（英文）Structural Studies of Multicultural Interrelations

研究代表者
度会 好一（WATARAI YOSHIICHI）
法政大学・国際文化学部・教授
研究者番号：00054338

研究成果の概要：

16 世紀のポルトガルに隠れユダヤ教徒が大量発生した理由は、マノエル一世がユダヤ人を強制的にキリスト教に改宗させながら、彼らの内面の信仰を黙認したことにある。マノエルの期待通り、彼らはポルトガルの海外膨張に貢献しただけでなく、アントウェルペン、アムステルダム、ロンドンに進出して植民主義の尖兵となった。文化的には、キリスト教徒を装った隠れユダヤ教徒として、割礼をせず、祈りの時に跪き、救済を個人的なものとする、ユダヤ教徒らしからぬ雑種であった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	900,000	0	900,000
年度			
年度			
年度			
年度			
総 計	900,000	0	900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：英米・英語圏文学
キーワード：マラーノ、植民主義、多文化相関

1. 研究開始当初の背景

2004 年～2006 年の科学研究費補助金研究の成果を『ユダヤ人とイギリス帝国』（岩波書店 2007）としてまとめたとき、ヨーロッパから南北アメリカ大陸にまで散らばるマラーノ（キリスト教に改宗しながらひそかにユダヤ教を実践しているのではないかと疑われた人々）の国際学的な研究が欧米でも極めて少ないことを痛感していた。日本の実情はさらに貧弱であって、マラーノについての本格的研究がなされていないのみならず、イングランドのエリザベス朝、ジェイムズ朝に登場する所謂「ユダヤ人」は、

1290 年の追放以来ひそかに残存していたユダヤ人であると思い込み、彼らが実はポルトガル出身のマラーノであることを知らないシェイクスピア学者さえいる始末である。

2. 研究の目的

（1）16 世紀から 17 世紀にかけてイベリア半島、イングランド、フランス、フランドル、オランダから南北アメリカ大陸にまで分布していたマラーノは、そもそもどこから来たのか。どのような離散の遍歴を経たのか、異端審問とどのような関係にあるのか。

(2) 隠れユダヤ教徒がポルトガルの新キリスト教徒に多い理由はなにか。

(3) エリザベス朝、ジェイムズ朝のイングランドの「ユダヤ人」の正体は何か。

(4) (3)については、1594年に女王毒殺計画の汚名を着て処刑されたロペス事件の全貌を明らかにするかたちで詳しく追求し、イングランド、スペイン、オランダ、ポルトガルの国際政治、多文化相関構造の枠組みの中で明らかにする。

(5) 16世紀に植民主義大国として急成長したオランダ共和国の商業都市アムステルダムに拠点を築いたポルトガル系マラーノが、オランダの海外膨張に果たした役割はいかなるものか。

(6) キリスト教徒の仮面をかぶった隠れユダヤ教徒として、どのような文化的雑種性を帯びようになっていたのか。

3. 研究の方法

(1) スペイン・ポルトガルの異端審問記録は、でっち上げの記録で真実ではないと見る研究者もないではないが、異端審問記録は重要な事実を知らせてくれる一次資料として利用しなければならないと、私は考えている。ただし、これだけが一次資料ではなく、ユダヤ教のラビ達が残した資料、同時代のスペイン、ポルトガル、イングランドの国家文書も大切な一次資料であり、これらを批判的に読むことが、この研究の第一の方法である。

(2) 私の提唱する多文化相関構造研究は、いかなる文化といえども純粹に自己発達してきたことはないとの前提に立って、三つ以上の国境にまたがる広領域の文化的構造を抉り出そうとする。従来は国境を越える異文化間の交渉として見られていた文化現象を、多くの国境にまたがる広領域における動的な構造として捉えようとする。それは広領域のさまざまな文化が接触してせめぎあう相関関係の生み出す構造だから、空間軸だけでなく時間軸においても構造化しなければならない、動的な軟構造である。このような意識も方法の一つである。

4. 研究成果

(1) フェルナンドとイサベルが共同統治をおこないながらアラゴンとカスティーリヤの国家的統一に腐心していた時代のスペインが、王立の異端審問所を設置したのは、1480年。ユダヤ教からキリスト教に改宗したユダヤ人(新キリスト教徒)が急増したために、何かにつけてこの新キリスト教徒を隠れユダヤ教徒ではないかと疑って、政治的に不安定な状況を作りだしている分子に対処する為であった。王権が弱いことを意識していた二人のカトリック王は、**アンダルシアの貴族たちが隠れユダヤ教徒への不満を口実**

に謀反をたくらんだり、暴動をそそのかしたりしないためにも、新キリストの実態を国家規模で把握し、不心得な隠れユダヤ教徒があれば、これを一掃する必要を痛感したのである。

隠れユダヤ教徒の宣告を受けた新キリスト教徒が異端審問の拷問や財産没収に苦しんだだけでなく、異端審問にかけられたのち教会と和解した前科者も、公職に就けなかった。さらにすべての新キリスト教徒は、三代つづいてキリスト教徒であることを公職の基準とする「純血」の制度に苦しんだ(しかし、スペインが純血の制度一色に染まったと考えるのは、行き過ぎである)。スペインはさらに1492年、新キリスト教徒とユダヤ人の接触を禁じるためにユダヤ人を追放するという、大掛かりな措置に出た。

このとき、亡命生活を嫌った多くのユダヤ人がキリスト教に改宗してスペインに残留したが、その正確な数は不明である。誠実なキリスト教徒になった者も多かったが、隠れユダヤ教徒化した者も少なくなかった。政府とユダヤ人社会の重鎮であったセネオルは改宗を受け入れたが、もう一人の重鎮アブラバネルは亡命の道を選び、ユダヤ人社会は真つ二つに割れた。

(2) 改宗を潔しとしないユダヤ人の多くは、成人一人につき8クルゼイロの入国税で彼らを受け入れた隣国のポルトガルに殺到した。ところが、時の国王マヌエル一世は1496年12月、ユダヤ人追放令を発したかと思うと、全ユダヤ人を出国の為と称してリスボンに集結させ、彼らを教会内に力づくで引きずりこんで、強制的に洗礼を受けさせた。いや、そればかりではない、マヌエルは同年5月、彼ら新キリスト教徒の宗教活動の取調べを向こう20年間にわたって禁じた。つまり、表向きキリスト教徒でありさえすれば、内面の宗教的良心の問題は不問に付したのである。

この奇妙なマヌエルの行為の目的は一体何だったのか。

それを一言にして言えば、スペインの姫君と結婚する為に、スペインが要求するユダヤ人追放に応じたものの、**ポルトガルが海外膨張する為の有力な尖兵となるユダヤ人の経済力、航海技術を是非とも確保したかったのである。そして、このせいなのだ、ポルトガルの新キリスト教徒の中に大量の隠れユダヤ教徒が発生したのは。**

隠れユダヤ教徒が多く発生したポルトガルはユダヤ人逆殺事件を経験した後、異端審問制度を導入し、多くのマラーノは拷問、財産没収、公職追放などに痛めつけられたが、スペインと違っていたのは、アメリカ大陸への渡航を規制しなかったことである。

(3) エリザベス朝ロンドンに住んだ100人ほどの所謂「ユダヤ人」は、実はリスボンやアントウェルペンに本拠を構えていたポルトガル出身のマラーノ商人である。彼らはポルトガルの異端審問を逃れ、また富を追求するために、1510年代にアントウェルペンに拠点をつくり、1520年代からロンドンにも拠点をのびはじめた者たちやその子孫である。

ヘンリー八世が庇護した有力なポルトガル商人のディエゴ・メンデスは、1512年にアントウェルペンに支店を設けたあと、21年にロンドンに支店を設けた。このメンデスに雇われ、プリマスやサウサンプトンに寄港するポルトガルの香料船のマラーノ仲間を訪れては、アントウェルペンで待ち構える危険の最新情報を伝えていた人物とか、リスボンで火刑の宣告を受けながらロンドンに高飛びした人物とか、一旗あげようとアントウェルペンに渡り、アントウェルペンがスペイン軍の手に落ちるとロンドンに逃れ、ウォルシングムの諜報組織でスパイとして働いた人物とかの存在を確認できる。

彼らの多くはプロテスタントのキリスト教信者であると自称し、中にはキリスト教会墓地に埋葬された者さえあるが、多くは隠れユダヤ教徒であったと見られる。例えば、ヘクトル・ヌニェスは、マノエル一世に強制改宗させられたマラーノの家に生まれ、ポルトガルの名門コインブラ大学で医学を学び、1549年にアントウェルペンからロンドンに移住し、エリザベス政権の総理格であるウィリアム・セシルの侍医を勤め、イングランド教会に所属していたが、港町ブリストル在住の叔父にユダヤ教の祭日を教えるという、ユダヤ教通のユダヤ教徒であったことが確認できる。

(4) 1594年に女王の毒殺をはかったとして、大逆罪の罪を着せられて処刑されたロペス博士も同じマラーノであり、隠れユダヤ教徒であった。このロドリゴ・ロペスは、ポルトガルに生まれ、晩年になってもアムステルダムの秘密シナゴグ(ユダヤ教会堂)に献金を欠かさなかった。彼もヌニェスと同じくコインブラ大学で医学を修めた後、エリザベスが即位した1558年ころロンドンに渡って内科医を開業し、女王の寵臣であるレスター伯爵の侍医となり、1586年には女王の侍医の地位にまで上りつめた。ロペスは医師であるだけでなく多くの顔を持っていた。利権を持った商人であり、マラーノらしい国際的な情報網を生かした諜報員でもあったことなどがそれだが、もうひとつの顔は、1580年にスペインのフェリペ二世に武力併合されたポルトガルの愛国者としての

顔であり、スペインに抗して兵を挙げポルトガル王を名乗ったドン・アントニオの有力な側近であったことである。

彼はロンドンに亡命したドン・アントニオの亡命政権の事実上の外務大臣としてエリザベスの宮廷内の工作に携わっていた。

例えば、1588年にフェリペ二世がイングランド征服を企て無敵艦隊を派遣して失敗した時、エリザベスはすかさずポルトガル遠征隊派遣という報復作戦を立てたが、この報復作戦にロペスが参画していたことが国家文書で確認できる。

この報復作戦は、無敵艦隊の残存勢力を一掃する、アゾレス諸島を奪取してアメリカ大陸やカリブ海から運ばれて来るスペインの財宝を強奪する私掠船の基地を作る、リスボンを奪取してドン・アントニオをポルトガルの王座につける、という三項目から成っていた。

この計画は見事に失敗したが、女王もロペスも大金を投資したために、大きな損害をこうむった。そこで諜報員でもあったロペスは、イングランド諜報組織の元締めウォルシングムの下でおこなわれている和平交渉を偽装したスパイ活動を利用しながら、ひそかにスペインに和平交渉を呼びかけ、その仲介料として5万クラウンの報酬を得ようとしたのである。**ロペスは和平交渉の妨げになる主君のドン・アントニオを処分することをスペイン側に約束したが、女王毒殺を約束したことはない。**

その事実は、宰相格のウィリアム・セシルのつぎの書簡に明らかなことである、「ロペスは狂気の沙汰だが、アントニオに危害を加えてでも一儲けしたいという一心あるのみで、女王に対する反逆の計画など、こればかりもない」。受信者である切れ者の息子のロバートは、女王に伺候して同趣旨の報告をおこなっていた。

ところがその二週間後に、セシル派は派の総力をあげてロペスが女王暗殺の陰謀をしたというでっち上げ工作にまい進したのである。なぜこのような急旋回をセシル派はおこなったのか。それは、タカ派のエセックス伯とハト派のセシル派の間の深刻な主導権争いが絡んでいるからだが、これについては拙著『ヨーロッパの内なる異人—ユダヤ人問題の起源を探って』(岩波書店近刊)で詳述しているので、この簡単な報告では割愛させていただく。

(5) ロペスが処刑された1590年代、スペインを相手に独立戦争を繰り広げていたオランダ共和国の商業都市アムステルダムには、多くのポルトガル系マラーノがアントウェルペンを捨てて移り住んだ。彼らはアムステルダムに到着してまもなく、キリスト教

徒の仮面を脱ぎ捨ててユダヤ人であることを鮮明にし、ユダヤ人社会を形成しシナゴグを建設した。アムステルダムが黙認したからである。このオランダの寛容は1656年にユダヤ人の入国を黙認したイングランドよりも50年も早い。彼らオランダのユダヤ人は、オランダの植民主義の実行部隊である西インド会社の株主となり植民の尖兵となって奴隷貿易、サトウキビプランテーション経営、交易に携わった。この詳細についても、『ヨーロッパの内なる異人』に詳述したので、ここでは割愛する。

(6) 場所や時代を問わず一般にマラーノたちがキリスト教でもユダヤ教でもない独特の信仰の形式を持っていたことは確かである。多くの男性は割礼を受けていなかったし、食事に関するやかましい戒律も厳密に守ることが難しかったために、互いに同宗信徒というより先祖を共有するという意識を持っていたようである。マラーノ特有の煩悶として、子供たちにいつ秘密の信仰を打ち明けるかという悩みを挙げることができる。他人に何をしゃべるかわからない幼児期では危険すぎるし、成人してからでは遅すぎる、キリスト教徒になりきってしまう。そこで13歳の時におこなわれるユダヤ教の成人式の時が利用されたのではないかと考えられる。もう少し成長してから打ち明けた例も見つかるが、13歳の時に打ち明けた例がかなり見つかるのである。

17世紀オランダのポルトガル系マラーノについて言うなら、彼らはポルトガルの異端審問に対する憎しみをいさながらポルトガル人らしさを失わず、オランダ語ではなくポルトガル語を表現手段とし、ポルトガル演劇に熱中し、コーヒーハウスに通いながら、その一方では、オランダ人と同じように、自分達とアシケナジをはっきり区別し、アシケナジをユダヤ人とは認めなかったのである。

もう一つ確認できたことは、西暦70年のエルサレム神殿の崩壊以後にファリサイ派を中心にして再編され発達し、ヨーロッパ各地のユダヤ人を傘下においてきたラビ的ユダヤ教の何たるかを、ユダヤ人追放令下のイベリア半島のマラーノは知ることができなかったという点である。彼らは入手可能な旧約聖書だけを頼りにユダヤ教とは何かの概念を手に入れたが、そのために、折角アムステルダムに脱出して割礼を受け晴れてユダヤ人になったというのに、タルムードのファリサイ派流のこと細かな(たとえば、割礼の際にペニスをくわえて血を吸い取れなどという)細則を受け入れることができず、ユダヤ人社会から破門される者が続出した。この破門騒動の中から、ユダヤ・キリスト教の伝

統と決別した、最初の近代人が出現した。最初の近代人はマラーノだったのだ。イングランドの詩人マーヴェルの書いたとおり、「アムステルダムは、トルコ人、キリスト教徒、異教徒、ユダヤ人、各宗派の集散地となり、分派の造幣局となった。いかなる新奇な意見も信用されて、両替されずにはいない良心の銀行」だったわけだ。

(7) 本研究の国内外へのインパクト

この研究の成果だけでは、欧米にインパクトを与えることはできないが、この成果の一部として取り入れている拙著『ヨーロッパの内なる異人—ユダヤ人問題の起源を探る』ならば、それは十分に可能である。これは古代ローマ世界から中世イングランド、スペインを経て近代初期のイングランド、オランダまでのユダヤ人の歴史を被害者の歴史であってだけでなく、ヨーロッパ拡張の歴史を生きた加害者の歴史でもあったという複眼的視座から描いた大作である。残念ながら、出版不況のため刊行が遅れており、報告書に代えることができなかった。

(8) 今後の展望

この『ヨーロッパの内なる異人—ユダヤ人問題の起源を探る』の成果を踏まえて、十五世紀末から十六世紀にかけての日本の隠れキリシタンと欧米の隠れユダヤ教徒とを共時的に研究してゆくなら、さらに大きな視野が豁然と展開するだろう。タイトルは、「“隠れ”における多文化相関構造—隠れキリシタンと隠れユダヤ教徒の共時的研究」になるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

度会 好一

「多文化相関構造研究定位のための走り書」『異文化』第10号、2009年、pp. 199-218、査読無。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

度会 好一(WATARAI YOSHIICHI)

法政大学・国際文化学部・教授

研究者番号: 00054338

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし